

【目次】

■ 度数表記と TSD・12 の Key の関係

■ V 度圏・平行調・同主調

■ 短調の派生形～代理コード

短調の派生形の成り立ち

長調のカデンツ(終止形)を確認する

短調(自然短音階)のカデンツ(終止形)

短調(和声短音階)のカデンツ(終止形)ができた

短調(旋律短音階)のカデンツ(終止形)ができた

長調で短調のコード（代理コード）を使う理論の確立

■ （補足）なぜ、短調は bIII・bVI・bVII と書くの？

■ コード記号の慣例的な書き方の種類

■ 完全音程～ドミナントモーション

長音程、短音程、完全音程

完全音程で進行すると安定感が得られる

本当に V 度→ I 度は終止形？

ドミナントモーションの成立

■ ツーファイブ～セカンダリードミナント

4 音構成の黄金進行（ツーファイブ）

セカンダリードミナントの成り立ち

5 種類のツーファイブ

その他のセカンダリードミナント

※↑ここまで理解すれば、ボーカル曲（ボカロ曲含む）のほとんどのコード進行が度数で読み取れるようになります。既存楽曲の分析が作曲の基礎なので、その為の基礎力という事になります。

■ Sus4（Coming Soon）

- デイミニッシュ (Coming Soon)
- 裏コード (Coming Soon)
- アーメン終止 (Coming Soon)
- クリシェ (Coming Soon)
- テンションコード (Coming Soon)
- アボイドノート (Coming Soon)
- ペンタトニック (Coming Soon)

■ 度数表記と TSD ・ 12 の Key の関係

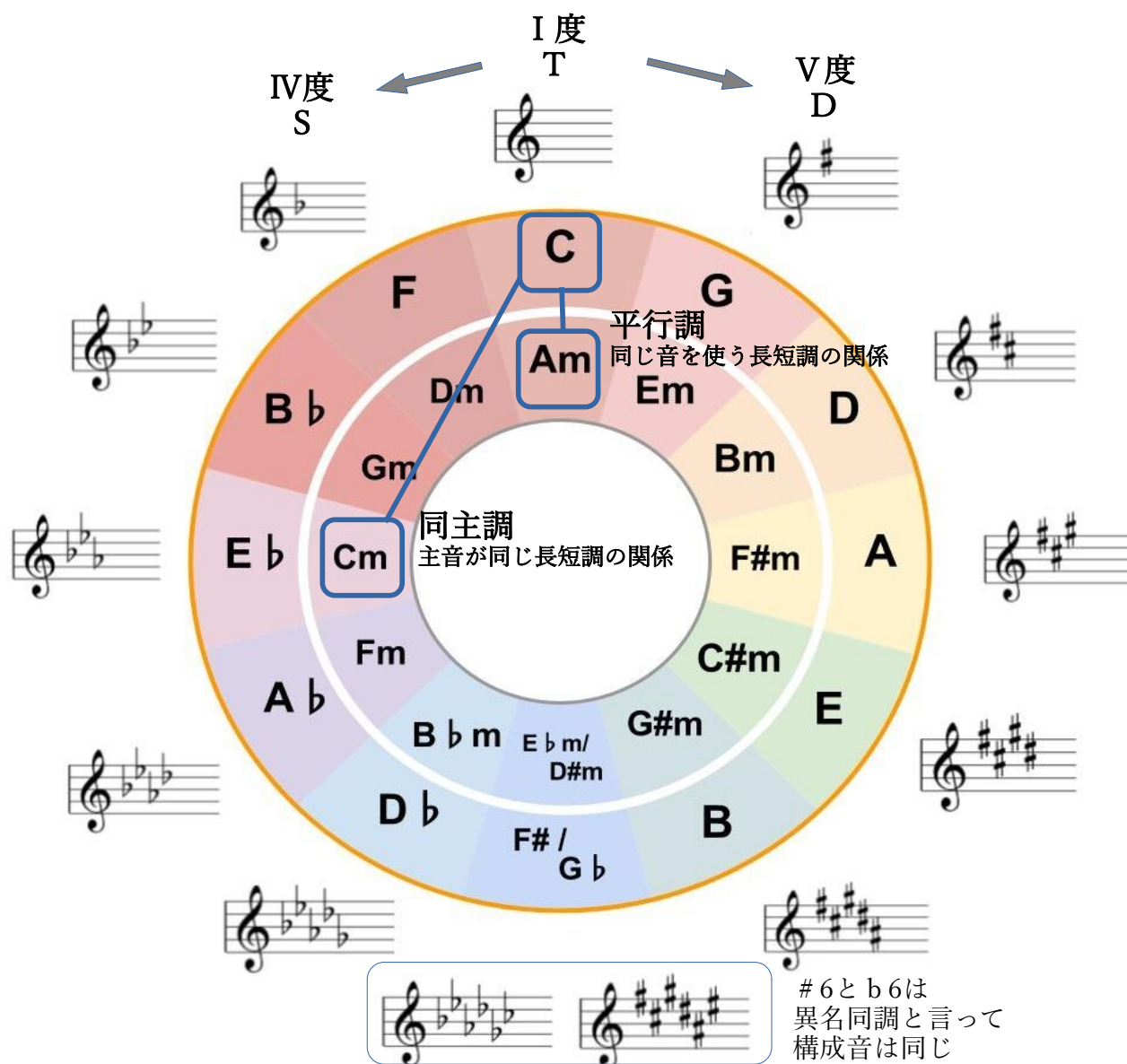
【ダイアトニックコード (3音構成, トライアド)】

Major Key			<u>I</u>	II m	III m	IV	V	VI m	VII m-5
Minor Key	<u>I m</u>	II m-5	b III	IV m	V m	b VI	b VII		
	T	S/D	T	S	T/D	S	D	T	S/D
0	<u>Am</u>	Bm-5	<u>C</u>	Dm	Em	F	G	Am	Bm-5
♭1	<u>Dm</u>	Em-5	<u>F</u>	Gm	Am	B♭	C	Dm	Em-5
♭2	<u>Gm</u>	Am-5	<u>B♭</u>	Cm	Dm	E♭	F	Gm	Am-5
♭3	<u>Cm</u>	Dm-5	<u>E♭</u>	Fm	Gm	A♭	B♭	Cm	Dm-5
♭4	<u>Fm</u>	Gm-5	<u>A♭</u>	B♭ m	Cm	D♭	E♭	Fm	Gm-5
♭5	<u>B♭ m</u>	Cm-5	<u>D♭</u>	E♭ m	Fm	G♭	A♭	B♭ m	Cm-5
♭6	<u>E♭ m</u>	Fm-5	<u>G♭</u>	A♭ m	B♭ m	C♭	D♭	E♭ m	Fm-5
#6	<u>D♯m</u>	E♯m-5	<u>F♯</u>	G♯m	A♯m	B	C♯	D♯m	E♯m-5
#5	<u>G♯m</u>	A♯m-5	<u>B</u>	C♯m	D♯m	E	F♯	G♯m	A♯m-5
#4	<u>C♯m</u>	D♯m-5	<u>E</u>	F♯m	G♯m	A	B	C♯m	D♯m-5
#3	<u>F♯m</u>	G♯m-5	<u>A</u>	Bm	C♯m	D	E	F♯m	G♯m-5
#2	<u>Bm</u>	C♯m-5	<u>D</u>	Em	F♯m	G	A	Bm	C♯m-5
#1	<u>Em</u>	F♯m-5	<u>G</u>	Am	Bm	C	D	Em	F♯m-5

【ダイアトニックコード (4音構成)】

Major Key			<u>I M7</u>	II m7	III m7	IV M7	V 7	VI m7	VII m7-5
Minor Key	<u>I m7</u>	II m7-5	b III M7	IV m7	V m7	b VI M7	b VII 7		
	T	S/D	T	S	T/D	S	D	T	S/D
0	<u>Am7</u>	Bm7-5	<u>CM7</u>	Dm7	Em7	FM7	G7	Am7	Bm7-5
♭1	<u>Dm7</u>	Em7-5	<u>FM7</u>	Gm7	Am7	B♭ M7	C7	Dm7	Em7-5
♭2	<u>Gm7</u>	Am7-5	<u>B♭ M7</u>	Cm7	Dm7	E♭ M7	F7	Gm7	Am7-5
♭3	<u>Cm7</u>	Dm7-5	<u>E♭ M7</u>	Fm7	Gm7	A♭ M7	B♭ 7	Cm7	Dm7-5
♭4	<u>Fm7</u>	Gm7-5	<u>A♭ M7</u>	B♭ m7	Cm7	D♭ M7	E♭ 7	Fm7	Gm7-5
♭5	<u>B♭ m7</u>	Cm7-5	<u>D♭ M7</u>	E♭ m7	Fm7	G♭ M7	A♭ 7	B♭ m7	Cm7-5
♭6	<u>E♭ m7</u>	Fm7-5	<u>G♭ M7</u>	A♭ m7	B♭ m7	C♭ M7	D♭ 7	E♭ m7	Fm7-5
#6	<u>D♯m7</u>	E♯m7-5	<u>F♯M7</u>	G♯m7	A♯m7	BM7	C♯7	D♯m7	E♯m7-5
#5	<u>G♯m7</u>	A♯m7-5	<u>BM7</u>	C♯m7	D♯m7	EM7	F♯7	G♯m7	A♯m7-5
#4	<u>C♯m7</u>	D♯m7-5	<u>EM7</u>	F♯m7	G♯m7	AM7	B7	C♯m7	D♯m7-5
#3	<u>F♯m7</u>	G♯m7-5	<u>AM7</u>	Bm7	C♯m7	DM7	E7	F♯m7	G♯m7-5
#2	<u>Bm7</u>	C♯m7-5	<u>DM7</u>	Em7	F♯m7	GM7	A7	Bm7	C♯m7-5
#1	<u>Em7</u>	F♯m7-5	<u>GM7</u>	Am7	Bm7	CM7	D7	Em7	F♯m7-5

■ V 度圏・平行調・同主調



■ 短調の派生形の成り立ち

※アプリを「長調、度数(長調表記)、3音構成、♩ C/Am」に設定

➤ 長調のカデンツ(終止形)を確認する

- I (T)→IV(S)→V (D)→ I (T) "王道進行"
- I (T)→II m(S)→V (D)→ I (T) "黄金進行"

※アプリを「短調、度数(短調表記)、3音構成、♩ C/Am」に設定

➤ 短調(自然短音階)のカデンツ(終止形)

- I m(T)→IVm(S)→V m(D)→ I m(T) <VI m→II m→III m→VI m>

昔のある人はこう考えた

「自然で綺麗だけど長調より終止感が薄いな。V mをVにしたらどうだろう？」

➤ 短調(和声短音階)のカデンツ(終止形)ができた

- I m(T)→IVm(S)→V (D)→ I m(T) <VI m→II m→III→VI m>

「おお、ガッツリ終わった感じがするね！じゃあ、次の場合は？」

- I m(T)→II m-5(S)→V (D)→ I m(T) <VI m→VII m-5→III→VI m>

「ワビサビ半端ないね。けど、悲しすぎるよね。II m-5をII mにしたらどうだろう？」

➤ 短調(旋律短音階)のカデンツ(終止形)ができた

- I m(T)→II m(S)→V (D)→ I m(T) <VI m→VII m→III→VI m>

「おお、流れが美しいね。それでいて悲しすぎず切ないね！」

「せっかくだから、変更した音を他の度数も同じように変更しておこう」

こうして、短調は3つの音階(コード群)ができあがった

「あれっ、ひょっとして、このコードたち長調のコードとも行き来できるんじゃない？」

つづく

■ 長調で短調のコード（代理コード）を使う理論の確立

※アプリを「長調、度数(長調表記)、3音構成、♯C/Am」に設定

➤ 平行短調からの代理コードが使われるようになった

- I (T)→I +5(T)→VI_m(T)→V (D) ※オギュメントを使用した代表例
- I (T)→IV (S)→#V_m-5(D)→VI(T) ※#V_m-5を使用した代表例

さらに、昔の人はこうも考えた

「平行短調だけじゃなくて、同主短調でもいけるんじゃない？」

※アプリを「長調、度数(長調表記)、3音構成、♯C/Am」に設定（そのまま）

➤ 同主短調からの代理コードが使われるようになった

- I (T)→IV_m(S)→V (D)→I (T) ※IV_m(S)を使用した代表例
「泣きのサブドミマイナー」とも言われ、ジャンル問わず最も使われる代理コード
- I (T)→IV (S)→bVI(T)→bVII(D) ※bVI と bVII を使用した代表例
一昔前のアニソン。短調からの借用なのに全てメジャーコードで攻め立てる

■ 補足

- それぞれ横並びのコード群を「ダイアトニックコード」と言う
(長調の～、自然短音階の～、和声短音階の～、旋律短音階の～)
- 長調、短調（自然短音階）以外のコードを「代理（借用）コード」と言う
- 同主調からコードを借用することを「モーダルインターチェンジ」と言う
- J-Pop は モーダルインターチェンジが大好きだが、ボカロ曲は特に多用される傾向
- 多用しすぎると臨時記号が多くなりすぎて、生身の人間が歌えなくなる。ボーカル曲では変化してる音（五線に起こした時に臨時記号が付く音）を使わないようにメロディラインを作るのか定石だが、初音ミク先生はそんな事おかまいなしに完璧に歌い上げてくれる
- 短調の場合は、同主長調から借用するという考え方も成り立つ
- 自然短音階：代表的なジャンルはロック
- 和声短音階：代表的なジャンルは昭和歌謡、演歌
- 旋律短音階：代表的なジャンルはクラシック、ジャズ
※上記ジャンルは、あくまでも傾向（必ずしもではない）

■ （補足）なぜ、短調はbIII・bVI・bVIIと書くの？

➤ 1つの長調を基準とした短調は2種類

- 平行調・・・ラ シ ド レ ミ ファ ソ
- 同主調・・・ド レ ミb ファ ソ ラb シb

- ✓ 短調のIII度・VI度・VII度のルート音は、長調に対して半音下がっている事を区別するために、慣例的に短調の場合はbIII・bVI・bVIIと書く。（但し、国際基準のようなものではないので、中にはbが書かれていない資料もあるので注意）

➤ 和声短音階は7番目の音が半音上がっている

- 平行調・・・ラ シ ド レ ミ ファ ソ#
- 同主調・・・ド レ ミb ファ ソ ラb シ(♯)

- ✓ 慣例的に同主短調に合せてるので、VII度にbが付いていない時は「和声短音階または旋律短音階のVII度」と読み解く

➤ 旋律短音階は6番目と7番目の音が半音上がっている

- 平行調・・・ラ シ ド レ ミ ファ# ソ#
- 同主調・・・ド レ ミb ファ ソ ラ(♯) シ(♯)

- ✓ VII度と同じように、VI度にbが付いていない時は「旋律短音階のVI度」と読み解く

■ コード記号の慣例的な書き方の種類

【長調・短調（自然短音階）で使用されるコード】

書き方	読み方	ダイアトニックコードの例 ※長調表記 短調表記	ドを基準とした構成音
__ M __maj __△	メイジャー	I bIII (ド・ミ・ソ)	ド・ミ・ソ
__M7 __maj7 __△7	メイジャーセブンス	I M7 bIII M7 (ド・ミ・ソ・シ)	ド・ミ・ソ・シ
__7	セブンス	V7 bVII7 (ソ・シ・レ・ファ)	ド・ミ・ソ・シb
__m __.	マイナー	VI m I m (ラ・ド・ミ)	ド・ミb・ソ
__m7 __-7	マイナーセブンス	VI m7 I m7 (ラ・ド・ミ・ソ)	ド・ミb・ソ・シb
__-5 __m(b5) ※__dimと書かれる場合もある	フラットファイブ	VII m-5 II m-5 (シ・レ・ファ)	ド・ミb・ソb
__7-5 __m7(b5) __∅	セブンスフラットファイブ	VII m7-5 II m7-5 (シ・レ・ファ・ラ)	ド・ミb・ソb・シb
__sus4	サスフォー	V sus4 - (ソ・ド・レ)	ド・ファ・ソ
__7sus4	サスフォーセブンス	V 7sus4 - (ソ・ド・レ・ファ)	ド・ファ・ソ・シb

↑ 五線に書いた時に臨時記号が付かない

【短調（和声短音階・旋律短音階）で追加されて使用されるコード】

書き方	読み方	ダイアトニックコードの例 ※長調表記 短調表記	ドを基準とした構成音
__mM7	マイナーメイジャーセブンス	VI mM7 I mM7 (ラ・ド・ミ・ソ#)	ド・ミb・ソ・シ
__+5 __aug __+ __(#5)	オギュメント	I +5 bIII+5 (ド・ミ・ソ#)	ド・ミ・ソ#
__M7+5 __aug7 __M7+ __M7(#5) ※Mが省略される場合がある	メイジャーセブンスオギュメント (オギュメントセブン)	I M7+5 bIII M7+5 (ド・ミ・ソ#・シ)	ド・ミ・ソ#・シ
__dim7 __° ※__dimと書かれる場合もある	ディミニッシュ (ディミニッシュセブン)	VII dim7 II dim7 (シ・レ・ファ・ラb)	ド・ミb・ソb・シbb

↑ 五線に書いた時に臨時記号が付く

■ 長音程、短音程、完全音程

➤ ドを基準にした音程の呼び方 ※ () 内は低い方へ動いた場合

- ド⇄レ 長2度 (短7度)
- ド⇄ミ 長3度 (短6度)
- ド⇄ファ 完全4度 (完全5度)
- ド⇄ソ 完全5度 (完全4度)
- ド⇄ラ 長6度 (短3度)
- ド⇄シ 長7度 (短2度)
- ド⇄ド 完全8度、完全1度

➤ ラを基準にした音程の呼び方 ※ () 内は低い方へ動いた場合

- ラ⇄シ 短2度 (長7度)
- ラ⇄ド 短3度 (長6度)
- ラ⇄レ 完全4度 (完全5度)
- ラ⇄ミ 完全5度 (完全4度)
- ラ⇄ファ 短6度 (長3度)
- ラ⇄ソ 短7度 (長2度)
- ラ⇄ラ 完全8度、完全1度

■ 完全音程で進行すると安定感が得られる

➤ 中でも下記2つの進行を「強進行」という

- ソからドへ下がる (完全5度下降)
- ソからドへ上がる (完全4度上昇)

そこから、V度→I度の進行を「完全終止」と呼ぶようになった

■ 本当にV度→I度は終止形？

➤ C→G→Cの進行はC MajorKey以外にも存在する

※アプリを「長調、音名表記、3音構成、 \flat C/Am」に設定（音名表記に変更）

- C(I)→G(V)→C(I) ⇒ 終止形に聴こえるのは先入観？

※アプリを「長調、音名表記、3音構成、 \sharp 1 G/Em」に設定（G MajorKeyに変更）

- G(I)→C(IV)→G(I)・・・同じ和音で並びが変わっただけ
⇒ C→G→Cを聴いた直後に聴くと、
G(I)→C(IV)の部分がG(V)→C(I)と終止形に聴こえる

つまり、V度→I度は他のKeyにI度→IV度の関係になってるものが存在するので、人によっては、終止形に聴こえていない可能性がありえる

■ ドミナントモーションの成立

➤ 確実な完全終止形

※アプリを「長調、音名表記、3&4音構成、 \flat C/Am」に設定（C MajorKey, 3&4音構成に変更）

- C(I)→G7(V7)→C(I) ⇒ 誰が聴いても終止形（「気をつけ、礼！！！」）

- ✓ \circ 7は各keyそれぞれ1ヵ所しかなく、確実にV7でKeyが定まる
（旋律短音階のIV7は、特殊なのでここでは無視する）
- ✓ V7(D)→I(T)の進行を「ドミナントモーション」と言う
- ✓ \circ 7は単体で聴いても不安定な響きなので、トニックに行きたい感が強い

■ 4音構成の黄金進行 (ツーファイブ)

※アプリを「長調、度数(長調表記)、3&4音構成、♯C/Am」に設定

➤ II m も II m7 にしてみる

- $\bigcirc \rightarrow \text{II m(S)} \rightarrow \text{V(D)} \rightarrow \text{I(T)}$ ※ \bigcirc は任意
- $\bigcirc \rightarrow \text{II m(S)} \rightarrow \text{V7(D)} \rightarrow \text{I(T)}$ ⇒ 終止感が増す
- $\bigcirc \rightarrow \text{II m7(S)} \rightarrow \text{V7(D)} \rightarrow \text{I(T)}$ ⇒ 「おお、繋がりが美しい！！」

✓ II m7(S)→V7(D)→I(T)は、ジャンル問わず黄金中の黄金

✓ 「ツーファイブ」または「ツーファイブワン」と言う

■ セカンダリードミナントの成り立ち

※アプリをの設定はそのまま、「セカンダリードミナント」の項目と組み合わせて使用

➤ II m が II に変形している場合は5度上のドミナントである

昔の人はこう気づいた

「II m7 から下降するとV7は完全5度じゃん」

「完全5度ってことは、ここでもドミナントモーション使えるんじゃない？」

- $\bigcirc \rightarrow \text{II m7(S)} \rightarrow \text{V7(D)} \rightarrow \text{I(T)}$ ※ツーファイブ
- $\bigcirc \rightarrow \text{II 7(?)} \rightarrow \text{V7(D)} \rightarrow \text{I(T)}$ ⇒ 「なんか、めっちゃ興奮するじゃん！！」

「どういう構造になってるんだろう？ 3音構成で考えてみるか！」

「そうだ！ II→Vは5度上のKeyで考えるとV→Iになってるんだ」

- $\text{II} = \text{V/V}$ (5度上の Dominant) ※"/V"の分母は"5度上の"という意味
→ $\text{V} = \text{I/V}$ (5度上の Tonic かつ 主 Key の Dominant) ※ここがポイント
→ I (主 Key の Tonic)

➤ II (D)→V (T&D)→I (T)の成立 (ダブルドミナント)

- $\text{O} \rightarrow \text{II} \rightarrow \text{V} \rightarrow \text{I}$ ($\text{O} \rightarrow \underline{\text{V}/\text{V}} \rightarrow \text{V} \rightarrow \text{I}$) ※3音構成
- $\text{O} \rightarrow \text{II } 7 \rightarrow \text{V} 7 \rightarrow \text{I}$ ($\text{O} \rightarrow \underline{\text{V } 7/\text{V}} \rightarrow \text{V} 7 \rightarrow \text{I}$) ※4音構成

✓ II→V→Iは「セカンダリドミナント」であり「ダブルドミナント」と言う

■ 5種類のツーファイブ

※アプリを「長調、度数(長調表記)、3&4音構成、♩ C/Am」に設定

- $\text{O} \rightarrow \text{II } m7 \rightarrow \text{V} 7 \rightarrow \text{I}$ ※長調

※アプリを「短調、度数(短調表記)、3&4音構成、♩ C/Am」に設定

- $\text{O} \rightarrow \text{II } m7-5 \rightarrow \text{V } m \rightarrow \text{I } m$ < $\text{O} \rightarrow \text{VII } m7-5 \rightarrow \text{III } m \rightarrow \text{VI } m$ > ※短調、自然短音階
- $\text{O} \rightarrow \text{II } m7-5 \rightarrow \text{V} 7 \rightarrow \text{I } m$ < $\text{O} \rightarrow \text{VII } m7-5 \rightarrow \text{III} \rightarrow \text{VI } m$ > ※短調、和声短音階
- $\text{O} \rightarrow \text{II } m7 \rightarrow \text{V} 7 \rightarrow \text{I } m$ < $\text{O} \rightarrow \text{VII } m7 \rightarrow \text{III} \rightarrow \text{VI } m$ > ※短調、旋律短音階

※アプリを「長調、度数(長調表記)、3&4音構成、♩ C/Am」に設定

- $\text{O} \rightarrow \text{II } 7 \rightarrow \text{V} 7 \rightarrow \text{I}$ ※長調、ダブルドミナント

■ その他のセカンダリードミナント

※アプリを「長調、度数(長調表記)、3&4 音構成、♩ C/Am」に設定

- $I 7 = V 7/IV$ (IV度上のV 7)
- $III 7 = V 7/VI$ (VI度上のV 7 = 平行短調のV 7)
- $\#IV 7 = V 7/VII$ (VII度上のV 7) ※ルート音が変化するので特殊
- $VI 7 = V 7/II$ (II度上のV 7)
- $VII 7 = V 7/III$ (III度上のV 7)

- ✓ 必ずV/○で表した時の分母の度数に進行する
- ✓ ポップスでは一時的に借用して主 Key にすぐ戻る
- ✓ クラシック・ジャズではセカンダリードミナントをきっかけに転調する
- ✓ ○m が○に変形された時と、V 7以外の○7が出てきた時は、まずセカンダリードミナントを疑ってみるべし